

講 師：森本公誠

- 森本 皆さん、こんにちは。東大寺の森本でございます。まず初めに、本日お招きくださいました花と緑の博覧会記念協会の皆さま方に御礼を申し上げたいと思います。

「華嚴」とは

この協会の「花と緑」という言葉にちなみまして、少し触れさせていただきたいことがございます。東大寺をお建てになった聖武天皇がおっしゃっている詔で、こういう詔がございます。「仏教にはいろいろなお経があるけれども、根本になるのは華嚴^{けごんきょう}経だ。この華嚴経を根本として、大乘・小乗の経・律・論はもちろんのこと、その注釈書すべてを兼ねて学ぶように」と。東大寺をはじめ、当時の12大寺（12の大きなお寺）の僧侶たちにこの詔を出されたのですが、東大寺ではこれを根拠といたしまして、華嚴宗という宗を名乗っているわけでございます。そんな宗派があったのかというくらい、知名度の小さな宗派でございます。

その「華嚴」という言葉であります。皆さま方よくご存じの中華思想という場合の「華」と「華嚴」の華とは、文字は一緒でありますけれども、そこに込められた意味内容は全く違います。中華思想の場合の「華（はな）」というのは中国そのものを指していますから、「華」といってもそれは1つしかありません。この華の周辺の国々というのは、中国よりも文化の劣った国だ、ということになっていきます。

ところが一方、華嚴という場合の「華」は、雑華嚴浄（ざっけごんじょう）の省略した形でありまして、自然界を見ますと大小さまざまな花が咲いていて、美しい。大輪のぼたんも、野辺に咲く小さな名も無き花も、精いっぱい咲いて自然を美しく飾っている。そのような意味の華でありまして、実は自然界と同じように、人間も一つとして同じ顔はございません。さまざまであるわけでございますけれども、雑華嚴浄というのは、その一人ひとりが一つの輝ける花となって、この世の中を美しく飾っていかうではないか、と呼び掛けている言葉であります。それは仏教を始められたお釈迦様（シャカムニブツタ）の教えを基にした一つの思想であります。このことをまず、頭に入れておいていただきたいと思っております。

さて、きょう私に与えられたテーマは、「物」と「心」の対比を基軸にいたしまして、人間をどのような存在だと考えればよいか。現代社会における人間観とはいかなるものか、あるいは、いかにあるべきかを問うという壮大なものでありま

す。これに対して私といたしましては、雑ばくな内容のお話しかできないと思いますけれども、暫時ご容赦願いたいと思います。

心と物の豊かさは別物

ところで、よくこういうことが言われます。「戦後60年、物は豊かになったけれども、心は貧しくなった」と。これは、昨今の世相——凶悪犯罪、公共におけるモラルの無さ、育児を放棄したり自分の子供を虐待したりする親、親を殺してしまう子供、年間3万人に達するという自殺の多さ、れっきとした企業や役所でありながら社会的・道義的責任感の無さ、個人の域を越えて、金銭的な利益のためには人を欺いてでも利潤を得ようとする企業の存在等々、枚挙にいとまがないほど、さまざまな事件が日常茶飯事的にメディアに登場するということから来る言葉であろうかと思えます。

それでは逆に、60年前は「物は貧しくとも心は豊かだった」と言えるか。しかし、これも必ずしもそうとは言えないのではないかと。60年以上前というのは軍国主義の国家体制です。そういう中で国中に計り知れない恐怖と抑圧が存在し、それをいわば反転するような形で、栄光や名誉といったものが国家の側から与えられた。おおかたの人々もそのことを受け入れていた。そういう時代だったと思われる。このような当時の状況からすれば、心が豊かだったとはとても言えないと思われまふ。

このように考えてきますと、「物は豊かになったけれども、心は貧しくなった」というのは、60年前の敗戦後の、極度に生活物資が不足していた時代の状況を反映していると思えます。当時の人々は、「衣食足りて礼節を知る」という言葉が示すように、「物が豊かになれば、心も豊かになる」と考えまして、ひたすら生活の豊かさを求めてきました。しかし、心は物の豊かさに連動するものではなく、別物であった。物の豊かさが、即幸福感につながるとは限らない。物が貧しくとも心は豊かになりうる場合もある。戦後の日本というのは結果として、心の問題をおろそかにしたために、今日のような世相を招いてしまったのではないかと思われまふ。

そこで、このようなことを反省材料として、戦前には教育勅語というものがあった、人々は一国民としてしっかりとした信念を持っていた。これからの日本は、

講師：森本公誠

これを人間教育の指針として、国を愛する人間を育てなければならない、と、そういう主張がございます。しかし、そのような主張を行う人というのは、おそらく当時の現実を知らない観念論者であると言わねばならないでしょう。過去の歴史というのは、現代に生きる人々にとっては指針のための一種の鑑にすぎないのであって、現代という時代に生きる者は、その鑑の中に生きることはできないのであります。

医学の進歩は、人間のモノ化をもたらした

話は全く違うことになりますが、最近、私どものお寺でこういうことが話題になりました。ある長老の話として、自分の教え子が大動脈瘤という大変な病気を抱えて、医者からも「手術しないと助からない」と言われた。では、手術をすれば助かるかということ、そういう保証はできない。助かるかもしれないし、そうでないかもしれない。本人は大変不安だったと思うのですが、しかし、本人は「手術にかける」と言って、手術を受けた。本人としては医学の進歩を信じたということだったのでしょうか。手術の結果、本人は植物人間になって、ずっと病院に入ったままだ、と。

そういうことで話は終わったのですが、これは、何も特殊なケースではないですね。実に多くの人々が、かつては経験することのなかった生き方を生きている。現代の医学の進歩はすさまじいもので、かつてならば当然死を受け入れねばならない病気であっても、医療技術による延命措置に、病を得た者の心は動くのであります。今や体内に流れている血液も含めまして、体の各部位は、まるで人間という「機械」の部品と化してしまっております。その結果が臓器移植などの医療技術であり、他者の臓器の提供を受ければ助かると言われた人は、延命措置に望みを託すことになります。しかし、その人には何らかの倫理的なわだかまりが付きまといまいます。すべてではないかもしれませんが、そういうケースが多いと思います。

脳死を人間の死とする人間観

脳死は人間の死であるという考え方も、おそらくは医療技術の発展の中から出てきたものだと思います。かつて「脳死は人間の死である」という新しい考え方

を根拠に、臓器移植を正当化しようとする医学界の趨勢に対して、主として文科系だと思いますが、学識経験者や宗教家たちの反発が我が国の場合でも起こりました。この議論は、医学に対する東西文明の伝統の相違を映し出しているのではないかと私は思います。象徴的な言葉が帝王切開で、これは英語では caesarean section と言いますが、この言葉が示しますように、ローマのシーザーが帝王切開で生まれたことに由来して名付けられたと伝えられています。古代のギリシャ・ローマでは外科手術が非常発達して、それは高位の人にも施された。ギリシャ人の医者で、ローマ皇帝の侍医になったガレノス Galenos (129 頃～199) という有名な方がおられますが、この人は、後にイスラム文明花やかりし頃、イスラム世界でも有名な医学者でありました。

ところが一方、東洋医学というのは、もちろん中国で発展したもので、前漢時代から後漢にかけて体系化されたと言われております。しかしながら実際面では、皇帝の身体の保全と延命を使命としていました。秦の始皇帝が不老長寿を求めるという有名な話がございすけれども、これは秦の始皇帝に限らず、後の歴代の皇帝の問題でもありました。その場合に、皇帝の体はメスを入れることができない「玉体（ぎょくたい）」だとして絶対視されました。その結果、医術を施す者としては投薬に頼るしかないわけで、薬草はむろんのこと、動物・鉱物をも薬剤に使ったさまざまな処方が試みられ、逆にそれによって命を落としてしまった皇帝も少なくなかったのであります。身体は物ではなく、心そのものの宿るところとされているわけでありまして、このような思想は東アジア共通の概念となり、日本においても、天皇は「全身延命」を心掛けるものとされました。因みにこれは、聖武天皇の言葉にも見られるものです。

人間にとって心の持つ重要性

かつての人間観というのは、心身の一体性、霊魂と身体の合一性ということが前提になっておりました。しかし、脳死を人間の死とする人間観というのは、心の存在をどこかに置き忘れ、身体そのものが問題になっております。重心は物としての身体に完全に移っていると言えます。とりわけ脳科学が発達した結果、人間の精神作用そのものをも、人間の一部分材である脳細胞の働きによる、とまで考えるようになってまいりました。人間の心の問題を扱う宗教の領分はどこに残っ

講師：森本公誠

ているのか、このまま科学の発達に人間存在のあり様を委ねてしまってもよいものか、ということでもあります。そうした疑問が高まってきているというのが現状ではないでしょうか。これは先ほど述べました「倫理観や道徳観の無さ」という世相とも連動しているかもしれません。

しかし、少なくとも仏教には、物質が精神作用を生むという考え方はございません。その意味では、物と心の両方がそれぞれ独立して存在しているという「物心二元論」に立っているのですが、今や世の中には物心一元論を越えて、人間のモノ化、物として人間を見てしまうという考え方が、急速に一般化しているように思われます。

人間にとっての心の持つ重要性というものが忘れられている。医学の進歩が死の恐怖を和らげ、人間の心を豊かにするということは、これはもう絶対否定できません。だが人間は永遠には生きられない、そういう存在です。それにもかかわらず、延命への期待感というのは、死への覚悟の備えができないまま、いつの間にか病院のベッドで死を迎えてしまった、そういう死者を多く生み出しているように思われます。私は、そのような状態の人が全国にどれだけおられるのか、病院のデータがあるのかないのかも知りませんが、おそらくはかなり多数の人がそうした病院生活を送っていると思います。死を覚悟して、近親者に後のことを託す。あるいは辞世の句や歌まで残すというのは、もはや日本人としては過去の文化になってしまったのかということでもあります。

先月、私も何度かお会いしたことのある小説家の吉村昭さんが、他人に頼ることなく、自ら生命維持装置を外して死を迎える備えをされていた、という報道がございました。この意味において吉村氏の選択は、死と向き合う患者にとってはむしろのこと、科学的装置でもって医療を施すお医者さんにとっても考えさせられる事例となったのではないのでしょうか。

人間にとって科学とは何か

では人間にとって科学とは何か。この問題を問うとき、科学がすべてを解決してくれるということは、おそらくありえないでしょう。科学は万能ではない。当然のことながら限界がある。「万能の神」という言葉がございしますが、この人類が生み出してきた崇拝の対象は、神であれ仏であれ、人格を持つ存在となり得た。

しかしながら、科学に人格を認めるということはない。科学には人格がないのです。

科学の発達がどうして継続されてきたかと言えば、それは、人間の絶ゆまざる好奇心、飽くなき知的欲求の賜物であります。それは知性の作用によっており、知的再生産の過程の中で発展してきたものであります。しかしながら、人間の持つ精神作用というのは知性にはとどまりません。人間には知性に加えて、感情と意志という要素も働いています。いわゆる知・情・意という三要素に分ける方法というのは誰に始まるのか私は存じませんが、いずれにしてもそれらの総合的な作用を伴って、個人としての人格が形成され、道徳的主体となることができると思われます。知性だけでは人格を形成することはできない。言い換えれば、科学は人格のいかんによって、「神の道具」にも「悪魔の道具」にもなりうるものであります。科学だけでは、人間はいかなる存在かを解くことも答えることもできない。どこかでこのことを再確認する必要があると思われまます。

先にも述べましたように、科学が発達する以前、大まかに言って人間は自らを心身に二分、すなわち「靈魂と身体」あるいは「精神と肉体」とに分けて、靈魂は自分が持っている体を支配する、統御する主体であり、身体は死とともに朽ちる存在であるけれども、靈魂は不滅である、と考えてまいりました。身体よりも心に絶対的価値をおいていました。日本でも中世までは、支配者のような、やがて神として祀られる人物は除いて、靈魂の離れた死体には何らの価値をも認めず、それらは埋葬もされずに、谷間に捨てられたと言われております。大切なのは靈魂であって、靈を祀るということは、後に残された者の義務と考えられてきました。そうした心というものに軸足を置いた心身の相関性は、近代ヨーロッパで発展してきた物心二元論によって崩れ去ってしまいました。

近代的物心二元論は、物と心の相互依存性を排除し、両者を完全に独立なものと規定いたしました。このことはやがて、物体のみで完結する近代物理学の成立を可能にし、科学の飛躍的發展をもたらしました。この点において、近代の物心二元論が果たしてきた役割というのは評価しなければならないと思います。

しかしその一方で、この二元論は、物のほうに軸足を移すというだけではなく、人間にとってはおのずから明らかと思える心身の相関性ということまで否定するという現象を引き起こしてしまいました。その結果、心身の問題にまで唯物論が

幅をきかすことになりました。今や、それが行き過ぎた議論であることは明らかであり、現代に生きる者は、心の視座（心から見た視点）を取り戻すというということが求められているのではないかと思います。

仏教の人間観—貪・瞋・癡

心といえば、人類は太古からさまざまな問いかけをしてきました。人間とは何か。人間はなぜ、生まれ、やがて老い、病を得て、死ぬのか。死というもの人間にとって恐怖をもたらすとすれば、ではどうして人間は生まれてくるのか。このようなことは人にとってはごく当たり前のことでもあるにもかかわらず、シャカムニブッタ、すなわちお釈迦さまは、生と死という目の前の現実に非常に苦しみ悩んだ。長じて妻を持ち、子供をもうけても、ブッタの悩みは晴れることがなく、ブッタはその苦悩の解決のために、29歳にして王子の地位を捨て、修行の旅にたちました。

私は、なぜ、ブッタが人生について深く悩むようになったのかについては、おそらく、ブッタは物心つくや、「自分には生みの母親というものがない。自分が生まれたときに産後の肥立ちが悪く、七日目に亡くなった。自分が生まれ出ることが母親の死につながった。自分が母親を殺してしまったのだ」という思いに取りつかれたからだと考えております。ブッタはやがて悟りを得て、長年の苦悩を乗り越え、心の闇を光に変えることができた。しかし、それはブッタを偉大な人生の師へと導く契機となったのであります。

一般に、仏教では人間をいかなる存在だと考えているかについては、『華嚴経』の次のような経文が参考になります。これは華嚴宗を標榜する寺院だけではなく、他の諸宗派でも唱えられている言葉でありまして、懺悔文（さんげもん）と呼ばれています。懺悔（ざんげ）という言葉がありますが、仏教では濁らないで「さんげ」と言います。原文は漢文ですが、一応読み下しをして申し上げますと、こういう文句であります。

「我れ昔造りし所の諸々の悪業は、みな無始以来の貪・瞋・癡により、身・語・意（身体・言葉・意志）を通して生じたもの。これらすべての悪業を我れ今皆懺悔する」。

これはどういうことを言っているかといいますと、ふだん我々は、法律的には

講師：森本公誠

間違っただけはしていないと思っているけれども、お釈迦さまの目から見れば、いろいろな間違っただけとしているかもしれない。そのような、自分がこれまでやってきた間違っただけの行為（悪業）は、いずれも人間が本性的に持っている貪欲（とんよく）の心、やさしく言うと、「むさぼり」の心、それから、自分としては得たいと思っているけれども、その通りにいかないことが大半ですね。そうすると、心がどういう変化を起こすか。得たいものが望み通りに得られないとき、人間には怒りの心が生まれますね。この怒りであるとか、憎しみであるとか、ねたみであるとか、そのような心を仏教では瞋恚（しんに）と言います。これをわかりやすく「いかり」と表現していますが、この本性的に持っている「いかり」の心、それから、こうしたことに対する真実とは何かを知らないという愚かな心、これを「愚癡」と言います。愚かさというのは、知能指数が低いとか高いとか、そういうことでの愚かさではないのです。真実とは何かを知らない愚かさです。自分たちがこれまで行ってしまった悪業は、これら三つの本性が原因となって、言葉や身体や意志を通じて生まれたもの。言葉で人を傷つけるとか、手という体の一部にナイフを持たせて人を殺してしまうとか、自分自身は手を下さないけれども、人を雇って殺すとか、何らかの手段で行った悪業ですね。これを全部今、懺悔いたします、という意味であります。

仏教では一般に、人間の善なる心を阻害する最も根源的な煩惱は貪・瞋・癡であるとして、これを毒素に例えて、「三毒」と称しております。『華嚴経』のこの言葉は、人間の本性からの目覚めと、懺悔による心の質的変換を説いているのであります。

自己と他者

さて、心というのはいわば個人の問題です。それでは何もかもが個人のこととして片付けられるかといえば、なかなかそうはいかない。それは、人間が一人では生きていけない存在、要するに、他人なしには生きていけない存在であるということに理由があります。すると今度は、自己自身と他者との関係のあり方が重要な問題となってきます。

この点についてのブッタの示唆は注目を引きまします。というのは、ブッタは悟りを開いた瞬間のことを語っておられるのですが、それによりますと、自分は他の

講 師：森本公誠

誰の頼りもなく自ら悟ったという確信があつて、「神々も含めて自分に比べられるものは存在しない。自分は神でもない、人間でもない、ブツダなのだ」とまで言い切っています。自分は人間ではなく悟った者である、ということ言われているのですね。悟りという自己自身の内からの心の変換という宗教体験によほどの自負があつたのだらうと思われます。そういう意味におきましてブツダは内省の人であります。

そのためか、自己と他者という関係においては、仏教は他者に原因を求めず、自らの心の内を見つめるということをお説いているのですね。常に焦点を自分自身の心の内面に当てて行こうとする態度であります。したがって、対立する自他においては、責めを、責任を他者に求めるという考え方はしていない。そこには宗教としての仏教の立場があると言えます。仏教には、キリスト教やイスラム、ユダヤ教など、旧約聖書系の宗教に見られるような「唯一なる絶対他者」、他のすべての神々を排除した神の観念は存在しないのであります。

これを今の世相に置き換えて考えますと、権利義務を巡る自分と他者との争いということが取り上げられると思ひます。権利とはいつたい何かということですが、元來は、自分の好き嫌いに關係なく、果たさなければならぬ義務というものがある、その義務の裏打ちがあつてこそ、法律が一定の利益をこの人には与えましようという、そういう力のこと。ところが今や、権利意識が独り歩きしているのが実情であらうと思ひます。ですから、自他のささいなもめ事であっても、法廷闘争に持ち込む。あるいは、暴力に訴えてまで、他者に責めを求める。そして自己の権利を主張する。そういうことが非常に多いように見受けられます。

このような考え方を日本人は昔からずつとしていたかという、そうではないでしょう。おそらくこれは割合と最近ではないかと思ひますが、こうした現象に、人間の持つ本性が拍車を掛けているように思ひます。仏教は人々の争いの原因となる本性に目覚めなさいよと教えてきたのだが、その教えが、もはや忘れ去られてしまつて、本性がそのまま顕在化している。そうした心の状態に権利主義が乗つかつて、ますます他者に責めを求める気風がはびこる。自分が9分9厘悪いと自覚していても、一分でも相手に非があれば、それを全面的に主張する。極端な言い方かもしれませんが、それが今の世の中に現象であらうかと思ひます。

荀子の批判論

人間の本性が善なのか、悪なのかということは、古代中国でも一つの論争の主題となりました。古い話ですが、今から2000年以上も前、孟子という人は、人間の本性は善だという性善説を唱えました。それに対して荀子という人が批判いたしました。この荀子の批判論というのは非常に興味深いものでありまして、少し紹介したいと思います。

荀子はまず、人間には、生まれながらに持っている能力である性「本性」と、努力して身に付けた能力である「偽」——これは人偏に「為す」という字です。普通は、偽善者とか、うそ偽りということですのですけれども、荀子の漢文の文脈でいうと、人が行うということで、天が与えた能力ではないということですので。習性であるとか、後天的本性といいますか、そういうものが備わっているとして、その2つを比べると、人の生まれながらに持っている本性というのは、悪くなる傾向を持っていて、努力して習得した「偽」こそが良いのであると述べまして、次のように論旨を展開しております。

それはまず、「人の生まれながらに持っている性質というのは、利益を得たいと願うものである。」要するに、商売的に言えばもうけたいという損得勘定ですね。それがいいとか悪いとか言っているわけではなく、そういう性質を持っていると。

「そして、これにそのまま従うと、人と争い、奪い合いが生じて、譲り合うということがなくなるのである。」自分だけでなく他人も欲しいということですから、当然争いが生じます。

2番目に、「また人は生まれながら、他人をねたみ憎むという感情を持っている。そこで、そのままそれに従うと、人を損ない、殺し合いが生じて、心から信じ合うことがなくなる。」

荀子は中国に仏教が入ってくるずっと以前の人ですが、ここまではお釈迦さまの言われていることと、非常に共通点があります。

3番目は、「人には生まれながら、美しいものを見たり聞いたりしたいという、目や耳の欲望というものがある。そこでそれにそのまま従うと、無制限に乱れ、淫らとなり、礼儀であるとか、文理（規則や道理）というものが無くなる。」

これらをまとめて、「このようなわけで、人は生まれつきの性質や感情のままに

従った行為をすれば、必ず争い、奪い合うという結果になって、社会の秩序や道理が破られることになり、ついに混乱に陥る。」

ではどうすればよいかについて、ここからの展開は非常に中国的なのですが、「だからこそ、どうしても先生の教化（きょうけ）や、礼儀の指導というものが必要であり、それによって初めて、人と譲り合い、社会のおきてや道理を守るようになり、ついには平和が実現するのである」と。

後半部分は今の時代において示唆的です。現在、教育問題ということがやかましく言われてきております。荀子の言う「礼儀」というのは、いわゆる「法」にあたると思われます。荀子の人間観は、個としての人間考察の域を越え、集団の中の人間を視野に入れているわけであります。

「人間はポリスの動物である」、要するに「社会的存在である」と言ったのは、古代ギリシャの哲学者アリストテレスであります。確かに人間は、社会とか国家を離れては存在し得ないと思われます。ここに、国家論や政治論が生まれてくる理由がございます。

社会的集団としての人間観

時間が長くなるかもしれませんが、せっかくですから申し上げますと、14世紀に、北アフリカの出身で、イスラム世界最大の歴史家と言われているイブン=ハルドゥーンという人がおりました。彼は、このアリストテレスの理論を発展させまして、一つの政治論を展開しております。

彼によりますと、「人間というのは、社会的結合の必要性にもかかわらず、」要するに、社会をつくらなければならない存在であるにもかかわらず、「自己保存の本性から権利侵害を行い、互いに闘争しあう。この状態が高じると、それは無政府状態につながり、人類は存続できず、文明は破壊される。このような状態を抑制するのが、連帯意識に裏打ちされた王権である。」統治権とってよいでしょう。

「しかしこの王権は、人間の闘争本能を抑圧することを本務とする以上、それ自身、強力な支配権を備えて、専制化しようとする傾向を持つ。専制化した主権者は、自己の意志を人民の能力以上に強制するので、その支配下の人民の生活は破滅の危機にさらされる。すると、人民は支配者に服従しなくなり、やがては暴動が起こったりして、その王権自身も崩壊する。」

講師：森本公誠

私どもは人類の歴史で、革命がいくつも起こったことを知っていますね。「そこで、王権のこのような専制化を抑制するものとして、大衆の認め従う政治的規範、いわゆる法というものが制定されねばならない。要するに、無政府状態であれ専制的支配であれ、抑制するもの、つまり抑制因子としての法の制定が必要なのである。」

彼はこのように述べて、他人の権利を侵害し、互いに闘争しようという本性を持つ人間が、社会的集団という場に置かれた場合の人間観というものを見事に描き出しています。

人間は、他の大勢の人の支えがあってこそ、生きていける。だが、支えているのは他者としての人間だけではない。地球上のあらゆる存在物も支えとなっており、そのおかげで生きていける。すべてはつながっているのだ、というのが仏教の考え方であります。実はこのように人間観についての視野が広がってきますと、それは、世界をどのように見るかという世界観、あるいは宇宙論にまで行き着きます。

人間はさまざまな形で、人間存在の領域でありますところの世界というものを全体的に把握しようと努めてきました。しかし知的把握には限界があって、それを補う形で、人間の感情や意志を投影した神々を生み出し、神話をつくってきました。人間は、神話の入り交じった世界観を通じて、宗教や倫理や道徳を生み出してきました。人それぞれは、そうした世界観を背景に、人生をいかに生きるかを反すうし、人の生きる道を探り、人生観を培ってきました。個々人にとっては、人間観は人生観にまとまる、収斂していくのであります。

人生とは苦である

ここで、人生について語られている幾つかの言葉を紹介したいと思います。まず1つ目は、このような言葉であります。

「幼くしては食欲に悩み、長じては性欲に悩み、老いては物欲に悩む。これ人なり。」これはお祈りの言葉です。内村鑑三という明治時代の大変偉い人が打ち立てました無教会派キリスト教の信者が、食前の祈りに述べた言葉だそうであります。小さいときからそれをずっと聞いている子供はどのように育っていくか、ということでもあります。

講 師：森本公誠

2つ目。「少年のときには良き態度を学び、青年のときには感情を制御することを学び、中年のときには正義を学び、老年に至っては良き助言者になることを学ぶ。そして悔いなく死ぬ。」人生学ぶことの大切さを語っているのですけれども、これは、アレキサンダー大王が東方遠征でインドまで来たおり、現在のアフガニスタンに何万人というギリシャの戦士たちが残されました。そのギリシャ人がバクトリア王国という国を建て、その一つの都市国家を建設した將軍の墓廟の壁を飾っていた言葉です。これは発掘で分かったのですが、そのギリシャ語の碑文を見ますと、はるか遠く、ギリシャ本土のデルフォイ（アテネの西方）まで出掛けて行って、そこのアポロ神殿の壁面を飾っていた神の言葉、神託を写し取ってきたというのですね。ギリシャ人というのは大変な人たちですね。

それから3つ目。私は袈裟を身に付けていますので、紹介したいのですが、お釈迦さまは「人生は苦である。四苦八苦の苦しみである」と説かれていますね。しかし最晩年に人生を省みられたのか、「この世界は美しい。人間の命は甘美なものだ」と語られたといえます。

21世紀という現代において、地球世界のグローバル化はますます進んでおります。交通や通信の手段の視点からすれば、地球はますます小さくなり、しかもその地球は人間の現代文明によって汚染されている。こうした状況からすれば、21世紀にふさわしい新たな世界観が構築され、新たな人間観とともに、それらが個々に反映した人生観が求められてしかるべきではないでしょうか。その意味において私が申し上げたいのは、最初に触れました華嚴の教え、一人ひとりが輝ける華となって、この世界を飾っていかうではないかということであります。